

2026 年度_宗教社会論演習・伝統文化論演習説明資料

担当者：三隅 貴史（みすみ・たかふみ）

2026 年度（・2028 年度[予定]）開講科目

春・宗教社会論演習（神話・伝説・物語の世界）／春・伝統文化論演習（都市の民俗学）
秋・宗教社会論演習（キリスト教と文化）／秋・伝統文化論演習（地域文化とレジリエンス）

（↓【参考】2025 年度（・2027 年度[予定]）開講科目／つまり、下は 2026 年度には開講されない授業のタイトル↓）

春・宗教社会論演習（日本の祭り・行事）／春・伝統文化論演習（歴史・民俗とまちづくり）

秋・宗教社会論演習（パワースポットとツーリズム）／秋・伝統文化論演習（民俗学の視点と方法）

担当者の演習では、質的調査に基づいて、以下のような社会現象を扱う。学問分野でいうと、民俗学・宗教社会学と称される分野である。量的研究は指導できない。スマホ・SNS など、主要なテーマとしては扱わない。

社会現象リスト：祭り・行事、伝統的な衣・食・住生活、地域活性化・まちづくり、観光、神話・伝説（都市伝説）・民話・昔話、物語、地場産業、文化財・文化遺産、町並み保全運動、ニュータウン開発とそこでの生活、怪異・妖怪、国内外の伝統宗教（神道・仏教・キリスト教など）、パワースポット、スピリチュアル、聖地巡礼・サブカルチャーと地域社会。

4 つの演習はそれぞれ、「(神話・伝説・物語の世界)」のように、サブタイトルでテーマを指定している。だが、そのテーマしか選択できないのではなく、どの演習でも↑の「社会現象リスト」の中から、自由に選択できる。

サブタイトルよりも重要なのは、4 つの演習が、①：「フィールドワークを学び、レポートを執筆する授業」と、②：「フィールドワークと文献講読を並行して学びつつ、読んだ文献について発表する授業」と、③：「広島伝統的な農村生活に関する資料を図書館で収集し、発表する授業」の 3 種類に分かれることである。自身がこれに挑戦してみたいと思うものを選択し、サブタイトルに全くとらわれずに、履修するとよい。

①：「フィールドワークを学び、レポートを執筆する授業」

○春・伝統文化論演習（都市の民俗学）

本授業の目標は、「現地資料」（郷土資料・人口統計やローカルな新聞・雑誌における記述、そして、自らによる観察や聞き取り調査の結果などのこと）の入手に必要なフィールドワークの技術を習得することにある。本授業のいうフィールドワークは、図書館・公共施設での資料収集・現地の観察、そして、インタビュー・参与観察などのことである。つまり、公共図書館での資料収集・分析から始める。最初から「とにかくあそこの人に話しかけてこい！」的なことにはならないので、その点は安心されたい。

座学でフィールドワークについて学んだ上で、広島県立図書館での資料収集、祭り・行事の現場の観察、インタビュー調査などに赴き、その成果について最終レポートを執筆する（約 40 点）。残りの 60 点は、約 5 回課される小課題である。欠席 1 回につき、合計点から 5 点減点する。

②：「フィールドワークと文献講読を並行して学びつつ、読んだ文献について発表する授業」

○春・宗教社会論演習（神話・伝説・物語の世界）／○秋・宗教社会論演習（キリスト教と文化）

本授業の目標は、文献講読を通して民俗学・宗教社会学の基礎知識を身につけること（2 年生）、先行研究批判・自身の研究の分析視角を提示する技術を身につけること（3 年生）である。加えて、基礎的なフィールドワークの技術の習得も目標の一つである。簡単な文献の内容発表を 3 回程度行う（約 60 点）。残りの約 40 点は、約 5 回

課される小課題である。欠席 1 回につき、合計点から 5 点減点する。

注意:「(神話・伝説・物語の世界)」に興味を持つ学生は、「フィールドワーク」「コミュニケーション」に関する、本資料の記述を熟読し、記載内容に同意したうえで本演習を履修すること（要するに、「物語」に興味があろうとも、全くフィールドワークをする気がない学生、他者とのコミュニケーションを取る気がない学生にはおすすめしない）。また、「(キリスト教と文化)」は、サブタイトルが独特だが、キリスト教について専門的に学ぶ授業にはしないので注意されたい。これもまた、他の演習と同じく、↑の「社会現象リスト」から自由にテーマを選べる授業である。キリスト教を学ぶこともできるが、履修者の中で少数派になる可能性を理解しておいてほしい。

③:「伝統的な農村生活に関する資料を収集し、発表する授業」

○秋・伝統文化論演習（地域文化とレジリエンス）

本授業の目標は、農村の伝統的生活に関する民俗学の基礎知識を身につけることと、「現地資料」の入手に必要なフィールドワークの技術を習得することにある。そのために、担当者が現在執筆している、「1950 年代の東京都東村山市・埼玉県所沢市の農村生活」に関する教科書の草稿を読み、内容を発表した上で、広島県内の農村において、どのような生活が行われていたのかについての資料を収集し、発表する（2 回の発表、約 60 点）。残りの約 40 点は、約 5 回課される小課題である。欠席 1 回につき、合計点から 5 点減点する。

具体的には、以下のような民俗学的なテーマについて学ぶ。一般的な大学生は、さほどこれらの伝統的な農村生活に興味を抱けないであろう。これらを調べることに興味を持てる学生以外の参加はおすすめしない。

「(地域文化とレジリエンス)」のテーマ：牛・馬（畜力）・人力を使った稲作、農村生活の機械化と圃場整備事業、屋敷空間・集落空間、イエとムラ、古民家・文化住宅、結核療養、野外民家集落博物館とドイツ・ロマン主義、生活改善運動、高度経済成長時代の都市と農村、「ふるさと」イメージ、都市伝説と都市民俗学、現代民俗学

2025 年度春・秋授業で学生・担当者が行ったフィールドワークの概要

担当者は、授業時間外に学生と広島中を歩き回りたいと考えている。そして、巡検の開始前・終了後に、希望者で食事をする（飲み会はしない）。積極的に土日等の予定を空けて参加してくれる学生を募集したい。意地でも参加したくない人には、本演習をおすすめしない。2025 年の履修者の参加率は平均 75%くらいか。

- ・みんなで広島県立図書館に行って資料を閲覧・複写したうえで、カフェでパンケーキを食べた（2 回）。
- ・お好み焼きを食べたあと、広島県民文化センターで「ひろしま神楽」定期公演を見学した。
- ・長束神社秋季例大祭奉納神楽（琴庄神楽団）・谷和集会所での神楽奉納（谷和神楽団）を見学した。
- ・グラタンを食べたあと、「えびす講騒動」（暴走族と警官隊の衝突事件）の現場を見学した。
- ・三次市の「三次もののけミュージアム」及び、稲生物怪録を活用したまちづくりを見学した。

以下に同意できる方のみ履修してください

- 授業を履修するにあたって、いわゆる「コミュ力」（≒合コンで場を盛り上げられる能力）はまったく必要ではない。ただ本授業が、人間を質的に調査する手法を教授する以上、「オープンマインドに」、つまり、眼前の人間にたいして「私はあなたの話に興味を持っています、お話がしたいです」という姿勢ができるという意味でのコミュニケーション能力が必要となる。そのため、本授業では、初対面に近い学生同士でのコミュニケーションの機会を意識的に多数設ける。絶対にやりたくない人には、本演習の履修をおすすめしない。コミュニケーションが得意ではない人も、学生同士での会話に挑戦してみようという意気込みを持ったうえで、この授業に参加してほしい。それは、歓迎する。この理由から、仲良しグループ全員で本演習に申し込んだ上で、固まって排他的な雰囲気を作ることはやめてほしい。

- 担当者は、「信仰」に深い関心を抱けないから宗教を研究している。ゆえに、「正しい宗教」に強いこだわりがある人、「カルト宗教」問題に対して揺るぎない自分の意見を持っている人の履修はおすすめしない。信仰上の・スピリチュアルな悩みについては、他の信頼できる方に相談してほしい。
- 「タイパ」がいい演習ではない。「タイパ＝最低限の努力で最低限の点数を取るための努力」以上の努力をしたい学生、つまり、「自分がこの現象について考えたいがゆえの努力」ができる学生に参加してほしい。
- 現在の演習履修者には、「真面目な優等生タイプ」の学生と、「(成績はともかく) 明るくて人懐っこいタイプ」の学生が併存している印象を受ける。どちらかのタイプの学生で固まるような演習にはならない気がするので、自分とは異なる個性を持つ学生と交流していく覚悟をもって、本演習に参加してほしい。
- 多くの学生はすでに、この説明資料が異常に長いと感じているでしょうが、担当者は毎回の演習系授業のレジュメをこれ以上の文字量で作成する異様に細かい人なので、ちゃんと全部読んでくれる人に本演習に来てほしいです。ここまでちゃんと読んでくれた人、ありがとうございました。

担当教員の自己紹介

民俗学者。兵庫県宝塚市生まれ・育ち。趣味は、国内／海外旅行と映画の物語論的分析。広島初心者。広島ネタでは、盆灯籠／飾り牛／1990年代の広島の暴走族／「youme」を「ゆめ」と読むという感性にハマっている。広島を公共交通機関で踏破したいと思っているので、みなさんにいろいろ教えてもらいたいです。今年学生に勧められた広島の祭り・行事や観光地にはほとんど行ったので、みなさんも指導し甲斐があるのでは（？）

Q&A

この資料を読んでなにか疑問があれば、遠慮なく担当者までメールで質問してほしい。

三隅 貴史
tmisumi@alpha.shudo-u.ac.jp